

【朴泳孝と漢詩】

須永文庫には新羅、高麗、朝鮮王朝の三代の詩を収録した『朝鮮三代詩』があります。朴泳孝が編纂し、明治20年9月に金港堂から刊行された42丁の活版本です。須永文庫の目録は鉛印本としています。

金港堂は当時有名な出版社で、この頃には二葉亭四迷の『浮雲』を出し、我が国初の商業文芸誌『都之花』を刊行するなど日本の近代文学史に欠かせない位置を占めています。

冒頭で張滋昉、藤川忠猷、山本正義の三人が「序」を寄せています。

張滋昉（1839～1900）は明治12年に中国から来日し、興亜会支那語学校や慶應義塾、東京外国語学校、帝国大学文科大学などで中国語を教えました。副島種臣ら政治家を含め多くの日本人と交流したことで知られます。

藤川忠猷（1818～1889）は高松藩の儒医の家に生まれ、三溪の号で知られる漢詩人でもあります。若いころ高島秋帆の門に入り、軍事技術などを学びました。農兵を西洋式銃陣法で教練し、藩内で大砲を鑄造するなどしましたが、嫌疑を受けて入獄しました。王政復古後に出獄すると、奥羽征討参軍として戊辰戦争に従軍し、その後、修史局御用係などを務め、『維新実記』などを著しました。水産関係の著書も多く、孫の天川維文による『藤川三溪・人と業績』（1982）によると、我が国水産学校の嚆矢である大日本水産学校を設立するなどしました。

山本正義（1852～？）は放卷の号を持つ漢学者です。不忍池に近い池之端に青海学校という私塾をおこすなどして教育に力を尽くしました。この学校は樋口一葉が通ったことで知られます。明治23年には教育勅語を桃太郎の説話と結びつけた『勅語図解 文武忠孝 教育桃太郎冊絵』を著しています。

須永の日記明治22年11月26日付に「訪山本青海於池端」とあります。朴泳孝と一緒に訪問したのですが、この山本青海と山本正義は同一人物か近い関係と思われる。井上與十生「黄は神聖の色彩なり」（三越呉服店『三越』第2巻第3号、1912年3月）によると、山本青海は「天地玄黄先生」とあだ名をつけられた漢学者で、「青海学舎」という看板を掲げて子弟を教育していました。

『朝鮮三代詩』に戻りますと、奥付には朴泳孝の名前はなく、編集兼発行人は東京府平民の西邨貞になっています。

西邨貞（1854～？）は佐野に近い足利の出身で、開成学校で化学を学びました。その後東京英語学校の教師や大阪師範学校長を務め、文部省の命で師範学校取り調べのため渡英。帰国後は文部省直轄の西洋式体操の教育機関である体操伝習所の主幹、文部省参事官などとして教育界で活躍しました。『朝鮮三代詩』刊行当時は金港堂の編輯所にも関係しました。

三人の「序」に続いてこうあります。

朝鮮三代詩

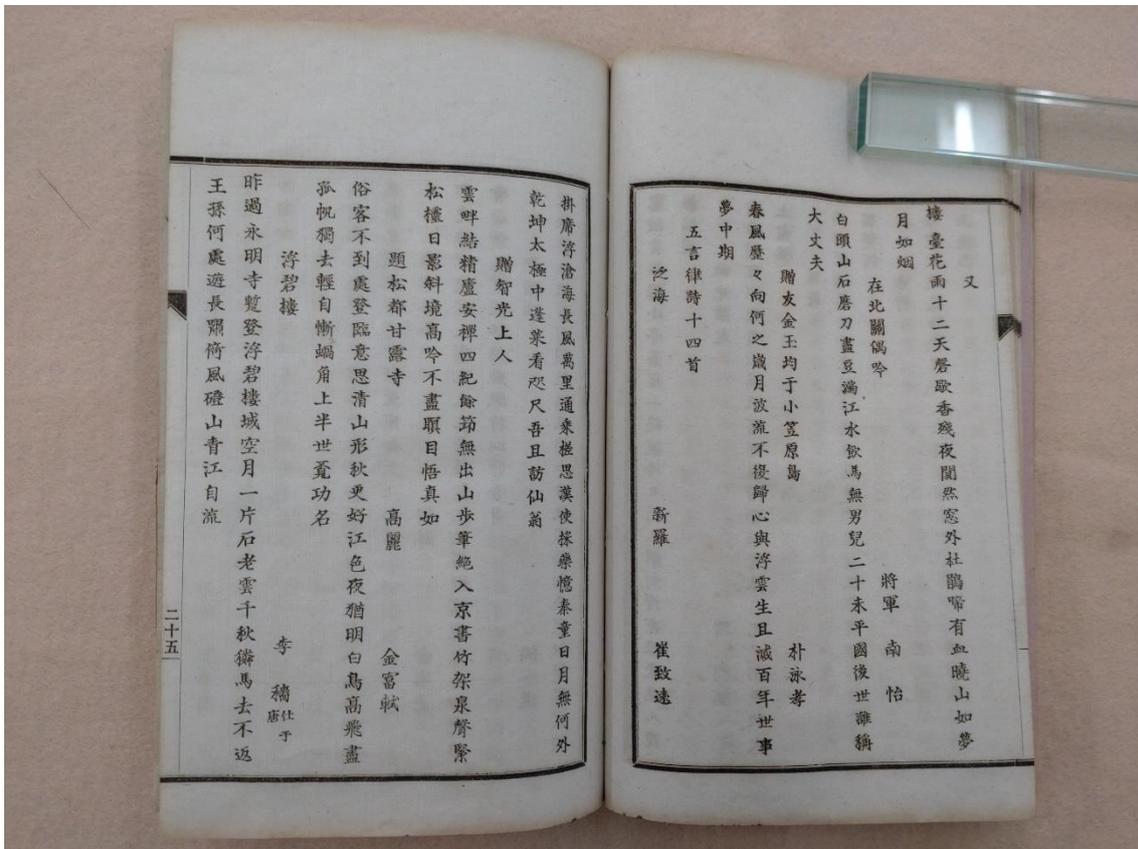
冽水 逸士 瓠舩 朴泳孝 輯

「冽」は「冽」と通用し、「冽水」とは、古くは平壤などを流れる大同江を言ったようですが、朝鮮時代には漢江をこう呼ぶようになりました。朴泳孝の号は春臯、玄々居士が知られていますが、瓠舫もその一つようです。張滋昉も序で「朴君瓠舫」と記しています。この後、新羅崔致遠の五言古詩「江南女」を筆頭に計 257 首が詩体ごとに分けて掲載されています。

この中には朴泳孝自身の七言絶句も一首入っています。

贈友金玉均于小笠原島 朴泳孝

春風歷々向何之
歲月波流不復歸
心與浮雲生且滅
百年世事夢中期



小笠原に隔離されている盟友の金玉均に贈ったものですが、実は二人には確執がありました。

【確執】

須永の日記明治 21 年 4 月 4 日付によりますと、ある日、二人が甲申政変当時の思い出話をしました。意識します。

朴泳孝は金玉均に言いました。「なぜ足下は陛下を支那の陣営に行かせたのか」

金玉均は「嗚呼、終わった事をなぜ今日あれこれ言うのか」。

朴泳孝も譲らず、お互い怒気を含み、関係が悪化しました。

甲申政変失敗の理由は様々指摘されていますが、朴泳孝は、金玉均の不手際から国王が清国の陣営に移ったのが原因と認識していることがうかがえます。

6月21日付の日記にも朴泳孝が須永を訪れて甲申政変を語り、暗に金玉均の行動を批判しているところがあります。

社交的で多才だが金遣いの荒い金玉均と、どちらかと言えば生真面目な朴泳孝の性格の違いもあったのでしょうか、二人の不仲は新聞にも書かれるほどになりましたが、完全に決裂したわけではなく、わだかまりを抱えながらも二人の交流は続きました。

【南怡將軍】

『朝鮮三代詩』には朴泳孝の詩の直前に悲劇の將軍として知られる南怡（1441～1468）の「在北関偶吟」と題する七言絶句が載っています。

白頭山石磨刀尽
豆満江水飲馬無
男児二十未平国
後世誰称大丈夫

將軍は軍功著しく昇進を重ねましたが、この詩がもとで謀反の疑いをかけられ、処刑されました。

政敵が転句の「平」字を「得」字に改竄して讒言されたともいわれます。「男児二十にして国を得ずんば、後世誰か大丈夫と称せん」では穏やかではありません。

將軍は死後、名誉を回復され、民間では信仰の対象ともなりました。

金玉均に贈った詩と並べて掲載することには、甲申政変が謀反ではないということを訴える意図もあったと考えるのは深読みが過ぎるでしょうか。

題にある北関とは咸鏡道のことで、朝鮮半島最高峰の白頭山や中露との国境を流れる豆満江などがあります。

この詩は文献によっては「北征」と題し、承句の「水」が「流」になっているものもあります。下定雅弘・豊福健二編著『朝鮮漢詩古今名作選』（勉誠出版、2019）によると、韓国江原道春川市の南怡島にある詩碑も「水」字になっているということで、同書も「水」を採用しています。ただ、「流」なら平仄が「仄仄平平仄仄平」ですが、「水」であれば「仄仄平仄仄平」となり、「二四不同」の近体詩の原則に反するようにも思うのですが、いかがでしょうか。詳しい方にご教示いただければ幸いです。

朴泳孝がこの詩を認めた扇面も須永文庫にあります。こちらの落款は以下の通りです。

辛卯之夏為
須永君正
玄々居士
朴泳孝

辛卯は明治 24 年です。

【余談】

前回、佐野ラーメンの話題に絡み、「サノラミョン」という歌を取り上げましたが、この時の調査には東京大学の月脚達彦教授が加わり、休憩時間にこの曲を口ずさんでいただけたことがいい思い出としてあります。前回の原稿を読んだ月脚教授から詳しい追加の説明があしました。

それによりますと、サノラミョンは生きていればという意味で、歌の冒頭は、「生きていれば、いつかは、よい日も来るだろうさ」という歌詞だということです。

1980 年代の学生運動でよく歌われたそうです。

ご教示に感謝します。

2024 年 3 月 16 日 広沢有久